ネパールの風

’９８ネパール日記　その・５

後藤　隆徳

第５日目　　４月２７日（晴）　高岡・今泉（Ａ・Ｂ隊）ゴラ・タベラ７：２０～キャンジュン・ゴンバ１５：５０
気温８度　　後藤・加藤ゴラ・タベラにて１日停滞

熱は下がらず、ネパールの人情にふれる

最悪の夜は長かった。もだえ苦しみ朝になっても熱は依然３９度近くあり、朝食は摂れず下痢もひどく気分は全く優れなかった。これでは今日の行動は絶対無理である。

しかし、とにかく高岡、今泉には明日の再会を約し予定通り先行してもらう。それが私の意思だった。今泉に高岡をくれぐれもよろしくと頼む。今泉は快諾してくれた。

シコタと今後のことを相談する。実は幸運にも今日、アルパイン・ツアーの今回の我々の窓口だったウエガキがカトマンドゥからヘリコプターでここに来るという。そして明朝も別のヘリが来るという。

もし、今日一日経過して熱が下がらなかった場合、ウエガキにカトマンドゥの病院の紹介状を書いてもらい、明朝のヘリで下山し入院したほうが良いとの結論に達した。

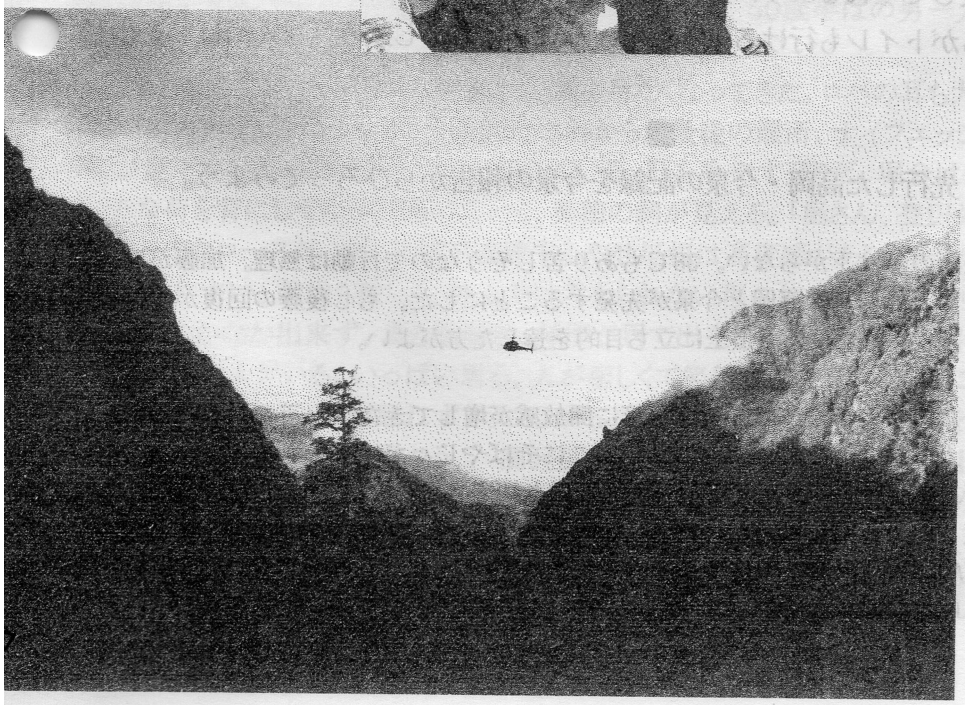
■

隊は出発した。いろいろな思いが頭を巡った。このまま熱が下がらなかったら、やはりカトマンドゥに下山するのだろうか。よりによってこんな時に・・・。入院してどこも登らず、おめおめと日本に帰れるだろうか。その時は、頭を丸めなきゃいかんだろうな・・・。熱は依然として下がらず、急に悲観的になってしまった。

とにかく胃のあたりが気持ち悪く食べるものが全く入らない。すぐ隣のロッジの主人のナールンさんが一つだけあるテントを不審に思い、心配して訪ねてくれた。背は加藤より小さく一見老けて見えるが、実はまだ若く優しい感じの方だった。

加藤が手振り、身振りで「熱がある、気持ち悪い」と伝える。ナールンさんは「分かった、分かった」と大きくうなずき、心配そうに帰っていった。

しばらくするとナールンさんが再び訪れた。何か作って持って来てくれたようだ。加藤が手にするとそれは「ニンニクスープ」のようだった。



(上) 5/28 世話になったナールンさんと共にヤセてズボンがゆるかった

(中) ナールンさんのロッチの中 チャーハンを作っている

(下) カトマンドゥへ下山する予定のヘリコプター

ナールンさんは「熱によく効くから飲め」という風に、これまた手振り、身振りで勧める。言葉は通じなくても、何とか気持ちは通じるものである。

「ウッ」と鼻に来る感じだったが、とにかくここは我慢しニンニクを少し食べ、スープをちょっと飲んだ。それ以上は駄目でまた横ってしまった。

その間、ナールンさんはテントの入り口で手を広げ、何か言いながら、インド系の彫りの深い顔を悲しそうに歪め、ジッと我々を見守っていた。赤の他人の、どこの馬の骨とも分からぬ我々を、心から心配してくれてる風に見えた。ネパールで初めて触れる人情だった。ありがたかった。大いに勇気づけられた。

昼には今度、チャーハン風のゴハンを持って来てくれた。加藤は腹が減っただろうから食べるべきだったが、私が「匂いが強く気持ち悪い」と言ったら、食べないで返してしまった。申し訳ないことをした。

それでも１５時頃になるとだいぶ気分は良くなって来た。熱も幾分下がり始め、３７度台になってきた。気分が良くなれば現金なもので「何クソ、この程度の熱で負けてたまるか。俺はやるぞ、明日は行くぞ」と思えてくる。加藤も「そうだ、そうだ」とエールを送ってくれた。

ウエガキがヘリで到着した。仲間の中高年を何人か連れていた。事情は無線で知っていたらしく心配そうにやって来た。彼とは日本で会ったことはなく、電話でのやりとりだけだったが感じの良い方だった。

さつそく明日カトマンドゥに下山した場合のメモを頂いた。アルパイン・ツアーのカトマンドゥ連絡先と氏名、そして病院名が書かれていた。多分、こんなことは時々あることなのだろう。慣れている感じだった。

ウエガキには今朝、高岡に渡し忘れた「登頂時の記念横断幕」を明日、キャンジュン・ゴンバで会ったら渡してくれるように依頼した。

まだフラフラするがトイレも行けるようになった。水物を少し飲み「きんつば」を少しかじった。

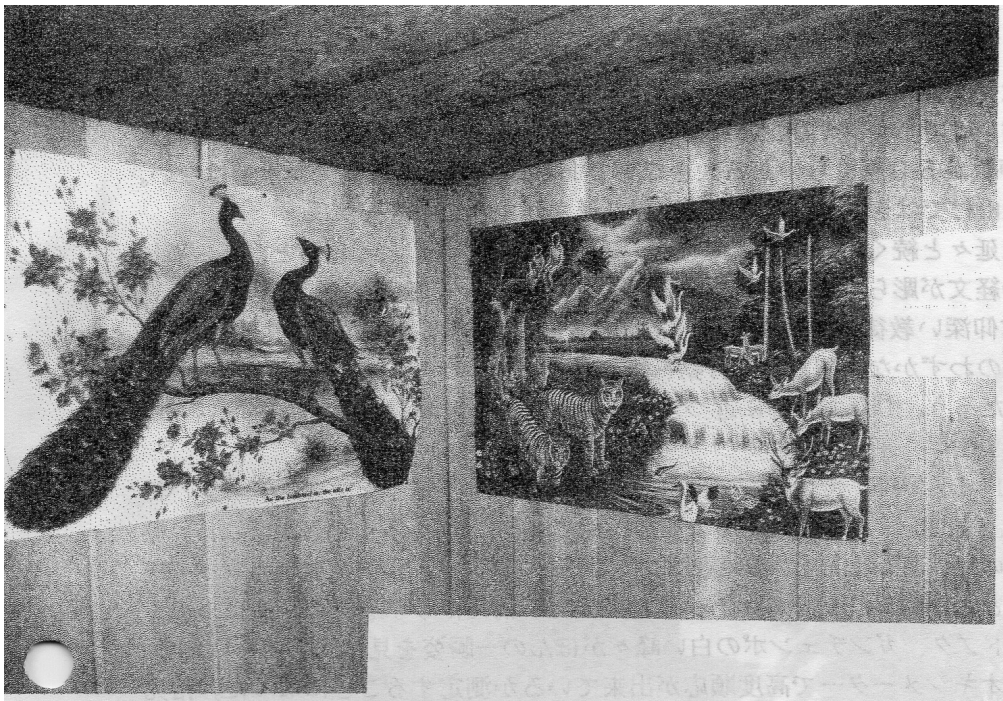
■

それではここで、先行した高岡・今泉の記録を今泉の報告からひろってみよう。

朝になっても後藤の熱は下がらない。38℃もあり苦しそうなので行動は無理。加藤が看病のため付き添うことにして、高岡と今泉が先発することにした。もし後藤の回復が遅れた場合を想定すると、高岡だけでも頂上に立ち目的を達した方がよい。

左右の切り立った山が少しずつ離れて、次第に開放感が増してきた。山道の両側には畑が広がってきた。人里から遠く離れているが、ここにそばやじゃがいもでも植えるのだろうか？　今はまだ、雪解けが終わったばかりなので耕されてはいない。

空は青く澄み渡り、日差しを遮るものはない。暑さを感じる。朝7:30に出発してから１時間半、THANGSHYAPに到着。3､200mの高地なのに大きなワラビがたくさんある。50cm位の背丈のものがいくらでも採れる。



(上) ナールンさんのロッ
の中のラマ教の
極楽浄土？の絵
(中) 左手奥にランタン
リルンを仰ぎ和
は再び出発した
(下) アヤメに似たハ
シブルの花

両側の山はいよいよ高く、雪が白く輝いている。右手前方にポンゲンドプク5、930mが見え出した。まだ遠いのでヒマラヤひだを確認することは出来ない。11:05ランタン村で昼食をとる。ここは戸数が５０軒くらいある大きな村である。もちろん、電気、水道はない。明治時代の日本の山村ではきっとこんな生活が繰り返されていたのだろう。

なだらかな道に延々と続く石塀が見えてきた。近くまで来て石をよく見ると、どの石にもチベット仏教の経文が彫られている。これをマニ石という。１km余り続いている。永い年月を掛けて、信仰深い教徒達が営々と築けあげた姿を想い感慨にふける。食糧もない、人数も少ない、夏のわずかな期間だけが行動を許される厳しい自然の中で、人間はこれを造り続けていたのだろう。ひたすら神に近づきたいが為に。

13:15 SINDUM、14:55 YAMFU で休憩をとり、15:50 今日の幕営地キャンジングゴンパに到着した。ここは、3、850m。ついに富士山より高い地に来た。20mも歩くと息が切れる。やはり酸素が少ないのだ。目の前に4、200mのピーク、キャンジング・リーがそびえ立っている。雪はなく黒々とした岩肌を見せている。ガスが出たり消えたりするその合間に、ナヤカンガ、ポンゲンドプク、ガンチェンポの白い峰々がほんの一瞬姿を見せる。

今夜からパルスオキシメーターで高度順応が出来ているか測定することになった。指先を挟んで毛細血管の状態をチェックするらしい。全員クリア。

無線連絡によれば「後藤の病気は回復せず。明日、加藤と共にヘリでカトマンズへ下山する」と無念の知らせがあった。同行の仲間からも「残念」の声が聞こえる。高岡の思いを察すると、何としても我々二人は頂上に立ちたい。それが彼等二人の願いでもあるはず。夕食後は二人でテントを共にし、以前登った山の思い出を語り続けた。21:30高岡眠る。

第６日目　　４月２８日（晴）　高岡・今泉（Ａ・Ｂ隊）キャンジュン・ゴンバ８：００～４５００m峰１１：４５～キャンジュン・ゴンバ

後藤・加藤　ゴラ・タベラ７：３５～キャンジュン・ゴンバ１４：４５

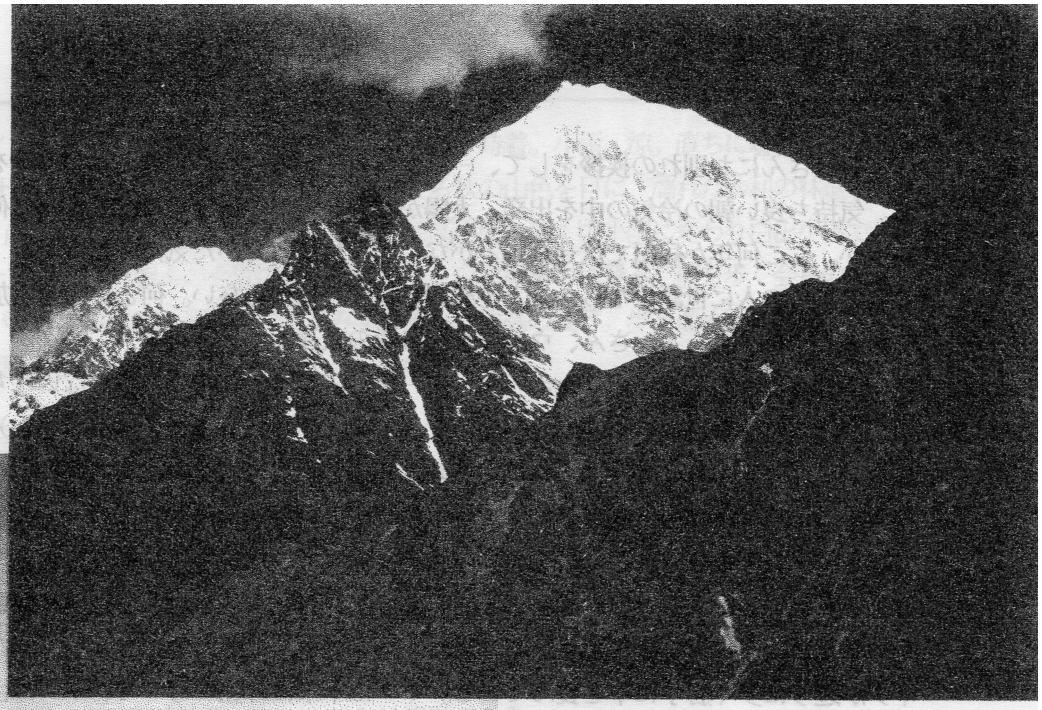
熱は下がった。再びみんなと合流

夜中の２：３０の検温は３６度３分だった。この調子なら明日はよさそう。下痢止めを２錠飲んだ。声にも張りが出てきた。やはり風邪だったのだろうか。

とにかく医者がいないこんな山奥で病気になるのは本当に怖い。風邪ぐらいならまだ何とかなるが大怪我、難病、そして仲間がいなかったらと思うとゾッとする。

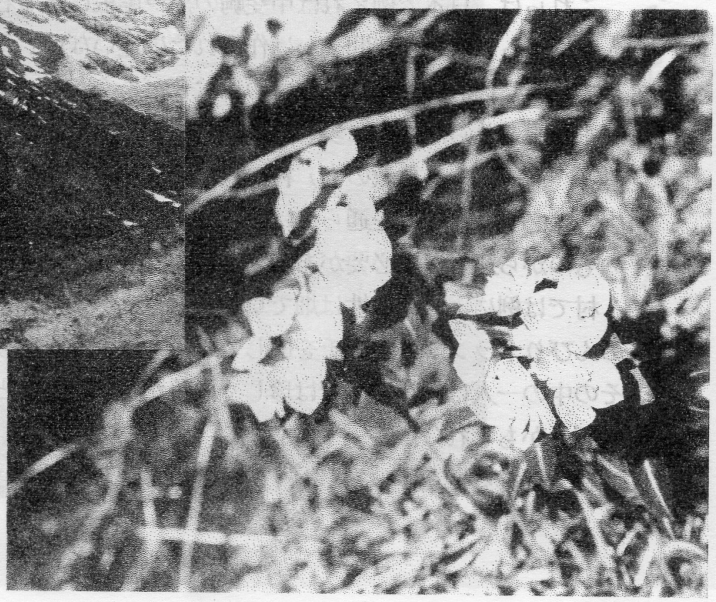
朝の気分はまずまずだった。だけど、昨夕から４回食事をしてないので、何となくフラフラ、クラクラする。これでは歩けないので少し食べた。

カトマンドゥに下山するハズだったヘリがにぎやかにやって来た。ただ、着陸したのはランタン・コーラの対岸で、アッという間に帰ってしまった。調子が戻ったので良かったが、あれでは搭乗する場合間に合わない。



(上)、(中)、 5/28 この日高岡、今泉は
4500m のキャンジン・リー
まで高度順化のため

(上)、(中)、 5/28 この日高岡、今泉は
4500m のキャンジン・リー
まで高度順化のため
登った。ランタン・リルン
が大きい
(下) 黄色のこんな花も咲いて
いた



ナールンさんにお別れの挨拶をして、一緒に写真を撮る。お礼に幾らかのお金を置いてきた。気持ち良い朝の冷気の中を出発。太陽が眩しかった。健康で歩けることは何て幸せなことか。ここ何年か病気で伏せたことがない私には忘れていた気持ちだった。

そして多くの人に世話になったことを感謝しなければならない。何といっても加藤、そして高岡、今泉、ナールンさん、ウエガキ、B隊の人達・・・。

途中までゴラ・タベラで雇ったポーターと一緒だったが、３０分も歩かないうちにキャンジュン・ゴンバからサーダーの兄弟のインダラ（２５）、前述のテック（２１）、そしてラルー（２４）が降りてきてくれた。私のためにこんなに大勢の人達が働いてくれた。ネパールのポーターは何て献身的なことか。ありがたい。

道はランタン・コーラのかつて氷河に削られた広々としたU字谷を遡って行く。谷の奥にはＰｏｎｇｇｅｍ・Ｄｏｐｋｕ（ポンゲン・ドプク、５９３０ｍ）が優美な銀姿を青空に光らせていた。いよいよ「ヒマラヤに来たな」という感じである。

ヤクが辺りに多く勝手に草を食んでいる。ヤクは本来は野性のもので、オスは巨体で非常に気が荒く小型ジープなどひっくり返す力があるそうだ。この辺りのヤクの大半はヤクと牛を掛け合わせたものでオスが「ゾッキョ」、メスが「ゾム」と呼ばれる。また、オスの多くは人間が使いやすいように「去勢」されているという。

■

Ｌａｎｇｔａｎｇの村に入ると、「マニ石」と呼ばれる、チベット仏教の経文を彫った（多くはオム・マニ・ペメ・フム＝おお、蓮華の座におわします宝珠の神よの意）の石、「マニ車」と呼ばれる、中に経文の入った円筒状の物が流水の力で自動的に回る水車、「チョルテン」と呼ばれる仏塔、「メンダン」と呼ばれる「マニ石」が壁状に連なった塚、タルチョーと呼ばれる、経文を木版印刷した祈願のぼり（空、風、火、水、地＝青、黄、赤、白、緑）が目立った。

これらは、日本で例えれば甲斐駒の黒戸尾根にある石碑みたいなものだろう。信心深い人々によって悠久の時間をかけ作られたに違いない。ただ、一見したところ古いものばかりで、新しいものが見られないのはなぜだろうか。

また、これらがここに多いのは、この辺りでは大きい、これから向かうキャンジュン・ゴンバ（チベット仏教の寺）村の入口だからであろうか。ちなみにこれらの脇を通過する場合は必ず「左側」を通らなければならない。「左手は不浄の手」なので、神聖なこれらのものから遠ざける必要がある、と言われる。

村では例によって女性は畑で草をむしり、男は日当たりのよい庭先で絨毯に円陣を組みのんびりトランプのバクチを興じている。カメラを向けても一向に気にする様子はない。その中の一人はネパールでは珍しく血色が良く、丸々と太っていた。ひょっとしたら裕福な胴元かもしれない。

村を外れると左手のすぐ近くに、ランタン・リルン（７２２５ｍ）の懸垂氷河が見られ

(上) チベット仏教の経文を彫ったマニ石

(中) 水車で仏具が回るマニ車

(下) マニ石の壁状、のメンダン

た。かつてはもっと大規模であっただろうに、今は大分後退している印象だった。
その手前にタルチョーがなびきゴンバが見えた。アヤメに似たハッシブル、大型のサクラ草が咲く段丘を越えると、今日の目的地で皆が待つキャンジュン・ゴンバが見えた。

■

それではここでまた先行した高岡・今泉の記録を今泉の報告からひろってみよう。

日の出前４時３０分にテントから抜け出る。西の空にかすかに雲があるだけで、群青色の天空に東方から金色の光が射し始めている。ランタンリルンの頂上に蛍ほどの輝きが見えだした。氷河で覆われた岩頭が金色の光を放つ。光の塊が動く様子をひとこまひとこまの写真では表現できない。フィルムを次々入れ替える。５時過ぎ、朝焼けのショーが終わり興奮から醒めたら寒い朝であった。草原の霜が太陽の斜光でキラキラ光っていた。

今日１日は予備日であり、高度順応に充てる休養日でもある。ゆっくりと朝食を済ませ、希望者はキャンギング・リーに登ることにした。８時出発、ジグザグ道をゆっくり登って１０時に4､200mの頂上に到着した。目の前に迫るランタンリルンに圧倒される。希望者は更に上のピークを目指して良いと許可が下りる。元気な高岡と今泉はシェルパのディルと３人で更に登っていった。１１時２５分、約4､500mのピークに達した。荒々しいキムシュンの懸垂氷河は、今にも大崩を起こすような氷塊の河になっている。ランタンリルンの氷河より更に大規模で氷も青白い。
風もなく、春の明るい陽射しが肌に心地よい。１２時２０分他のメンバーが昼食を始めているテントへ到着。

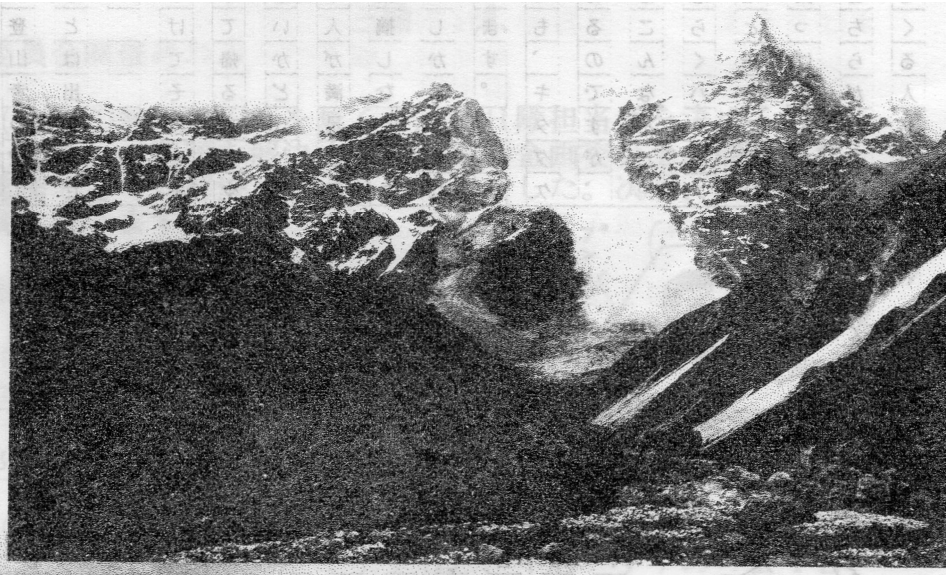
昼食後は近くのゴンパ（チベット仏教の寺）へ散策に出かける。サクラソーのような花がたくさん咲いていた。チーズ工場と思われる、屋根が低くて暗っぽい石造りの家から老人の顔がにゅっと現れてびっくりした。針金の網の上にのせてある黄色のチーズ状の小片を手にとって渡してくれた。笑顔でお礼をしてから食べてみる。チーズのような味がする。後藤と加藤の分２切をお土産に残した。（チーズではなく、じゃがいもを薄く切って干したものらしいことが後でわかった）

テント場に帰ったら、ゴラタベラからシェルパが到着していた。「後藤、加藤が登ってくる」とのこと。「なにっ！」「よし、迎えに行こう」二人は小踊りして喜んだ。そこへ、シェルパのニーマと加藤がそして後藤がしっかりした足どりでやってきた。
みんなで固く握手を交わした。

夕方、ガスで周囲の山は何も見えない。小雨も降ったが、夕食は再びにぎやかで愉しい会話がはずんだ。夜が更けると空はいつも満天の星に変わる。明け方、０℃位になるので夏用シュラフでは寒い。シュラフを２枚重ねると快適な眠りに誘われる。

丘から見るキャンジュン・ゴンバはU字谷に５０戸位の家が広がる大きな村だつた。ヘリコプターは無論、一応飛行場もある。（勿論石がボコボコで未舗装）そして、もうここから上は人の住む村はなく夏に放牧をするカルカ（放牧小屋）があるだけだった。フラフラと歩いていくと、懐かしい？高岡と今泉が顔をクシャクシャにして出迎えてくれた。

ナマステ・ナマステ　　次号へつづく。



(上) 私をサポートして
れたシエルパ
左からインダラ、
ツク、ニマ、ラル

(中) ランタン・リルン
懸垂氷河

(下) 富士山より高い
3850mのキャン
ゴンバにようや
たどりついた